

青い森で働く WELCOME林業



【第3回日本伐木チャンピオンシップが開かれます!】――「青森県庁林政課」のFacebookを開いてみたら、そうあつた。『……過去2回の大会に引き続き、第3回も青森市で開催され、8月にノルウェーで行われる世界大会へ出場する選手を決定します』。

雲谷から“林業”発信 薪割りや丸太引き体験

林業は、山の中が仕事場だ。分け入った森の奥から、チェーンソーの音が聞こえてくる——そこがキコリの現場。チーンソーの音が止めば、聞こえてくるのは梢を揺らす風の音と鳥の鳴き声ばかりの、人里離れた山奥で、伸び立つ樹々を相手に黙々と作業を進めていく。林業という生業は、収穫の伐期を迎えるまで50年も、100年もの長い年月がかかることも特徴だ。伐っては植え、育て、世代を繼いで、山を守っていく。手入れの行き届いた森林は成長過程で二酸化炭素を吸収し、酸素を生む。山はまた雨水を溜め込み、それが川になる。

地域に暮らす人々の生活に密接に繋がり、支えている、この“林業”をもっと知つてもらおうと、「第3回日本伐木チャンピオンシップ」(2018年5月)の開催に併せ、同じ会場のモヤヒルズで、イベント『林業の魅力発信』が行われた。



斧を打ち下ろすと同時に膝を曲げるのが薪割りのコツ

競技大会の2日目（5月20日）に併せ、『隣接会場で、チェーンソー・アートや薪割り、丸太引き、高性能林業機械の操作体験など、一般の方や子どもを対象としたイベントも開催しますので、ぜひお越しください』——そのイベントが「林業の魅力発信」だ。当日、モヤヒルズに近づくにつれ、バイクが走り回るようなエンジン音が高まってきた。

「全国の林業従事者がモヤヒルズを目指すようになれば」「2014年5月にモヤヒルズで開かれた第1回日本伐木チャンピオンシップで、総合3位に入賞した秋田貢氏（青森県森林組合連合会）が、地元を、サッカーでは国立競技場を目指すように、林業ではモヤヒルズを——。秋田氏の願いは現実のものとなりつつあるようだ。

総勢68人のうち、本県からは

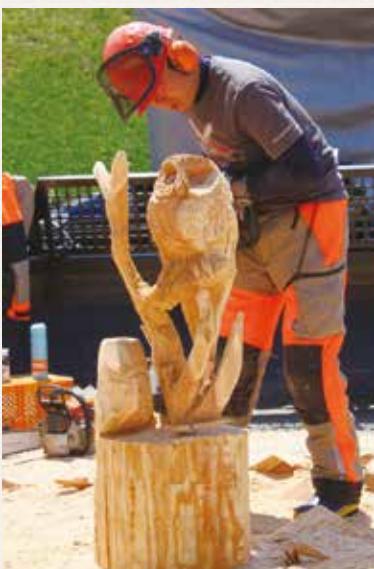
4人が参加した。決勝では、24歳以上の「プロフェッショナルクラス」で、先崎倫正氏（弘前市）が優勝。前田智広氏（外ヶ浜町）が2位、秋田貢氏が3位と本県勢が独占、レベルの高さが際立つた。

「林業の魅力発信」は、その決勝の日、競技会場に隣接する広場で行われた。伐木チャンピオンシップを盛り上げ、加えて、普段は人目につかない山の中での林業という仕事をアピールしようと、公益社団法人あおもり農林業支援センター・県林政課が主催した。

熊の背中をわしづかみ 丸太から動物削り出す メディアのインタビューにそう応えていた。野球では甲子園

目より先に耳を引くのが、

チェーンソーのあのエンジン音。見学に訪れた家族連れなどが、会場を震わす爆音に引かれてまず向かうのは、チェーンソー・アートのブースだ。



チェーンソーの刃先だけで丸太から削り出すチェーンソー・アート

熊の背中にのつて羽ばたく
鷲（わし）——まるで生きているかの
ような躍動感ある造形を、
チエーンソーの刃先だけで丸
太から削り出す芸術。熊をわ
しづかみにしたまま飛び立ち
そうな迫力だ。また今にもい
ななきそうな馬もいれば、大
きな目をぱちくりさせそくな

フクロウも。「青森カービング
クラブ」所属のアーチストた
ちによる実演を、取り巻く人
たちは感嘆の面持ちで見入っ
ていた。

その隣のブースで行われて
いたのは、"チエーンソー製材"。
チエーンソーで板を作るのだ。
台の上に横に置いた丸太に、

チエーンソーのバー（刃）を斜
めに押し付け、専用の道具で
ちによる実演を、取り巻く人
たちは感嘆の面持ちで見入っ
ていた。

ガ屑で白くして実演していた
のは、林政課の男性職員。森の
中に自動車が通れる道をつく
るときなどに現地でこうして
材材するのだそうだ。横に伐

るだけでなく、縦に伐
して板作りもでき
るとは、チエーン
ソーの用途は広い。

これから何を作
るのだろう——そ

正面に人だかりが
でき始めた。高さ50
cmほどの丸太の上

に、小丸太を立てて
ある。高さ約30cm、直
径10cm余りの小丸太

を、下の丸太にビス
で固定すると、ヘル
メットの耳栓を装着

し、チエーンソーの工
ンジンをかけたその

チエーンソーで板を作る"チエーンソー製材"

お顔——県林政課

の杉山徹課長であった。

水平にしたバーが、小丸太
に近づく。キーンと音がして
オガ屑が噴き出る。手元に
チエーンソーを固定しながら、
小丸太の周りをゆっくりと回
る。小丸太よりもひとまわり
小さな円を描いているのだ。一
周し、厚さ1cmほど下のところを、真横にスパッと切る。地
面に落ちた円盤状のものが作
品である。「木のせんべい」なの
だった。せんべいを切り取って



輪切りにした丸太は鉢植えの台などに利用できる



熟練の技で木の板に刻まれた「WELCOME」の文字(右が杉山徹課長)

は課長が、「欲しい人?」と聞く。手を挙げた男性が、持っていた紙袋の口を開けた。課長がそこへめがけてフリスビーの要領で放る。ナイスキャッチ!

次に課長は、地面に置いたスギの板にマジックで何かを書き出した。文字なのか記号なのか。その曲線の上を、チエーンソーの刃先で削り出

す。簡単に扱っているよう見える分だけ熟練の技なのだ。削った上からスプレーを吹き付ける。板の表面が青く染まつた。バーを水平にし、表面を削ると、刃先に削られた溝が青色の線となつて残った。課長が、その板を両手に持つて、こちらに向ける。浮き出た文字は——「WELCOME」

プレゼントされた板を手に、「家を建てたら玄関に飾りますよ」と笑顔のご夫婦。すかさず課長が、「建てるときにはぜひ県産材で」とPRしていた。

●●●●●●●●●●●●●●●●●● ガント使つて丸太引き グラッブルの操縦体験

「よーい、スタート!」——広場の中央で、「丸太引き」レース



「ガント」と呼ぶ道具で持ち上げて2人で運ぶ「丸太引き」レース

がら運んでいくのだ。昔は林内で玉切りした丸太を山場に集めるのに、トビやこのガンタを使って転がしたり雪の上を引いたりしたものらしい。

がら運んでいくの
だ。昔は林内で玉
切りした丸太を山
場に集めるのに、
トビやこのガンタ
を使って転がしたり
雪の上を引いたり
したものらしい。

スタートからゴールまで何秒かかるか。2組が参加してタイムを競う。スタート時にはゴールを力強く見据えていた若者の目も、運びながら徐々に下を向き、

丸太の頭が地面をこすり出し、ついに背中が丸まり、ゴール。肩で息をする。“林業は力仕事”であることを実感させた。

木を伐り倒す。玉切りする。切った丸太を一か所に集める。積んで山から出す——それらの作業が、格段に楽に、速くできるようになつたのが高性能グラップルという重機でアームを動かして操作する体験者



属の爪で丸太の頭を掴み、若者2人で持ち上げても、地面からちよつとしか離れない。後部に小型のタイヤが付いたその丸太を、歯を食いしばりな

林業機械のパワーである。会場で、実演されていた重機はグラップル。プロの操縦者が自分の手のようにアームを自在に動かしていた。体験希望者が運転席に乗り込んだものの、飛行機の操縦席に座ったように動かして、どうにかアームは運転席に乗り込んだものらしく、何をどうしていいか分からぬ表情。プロに教わって、どうにかアームは動いたが、右に行き過ぎ、左に行き過ぎ、くり返した末に、やっと丸太を正面の積み木の上に重ねることに成功。ご褒美に、プロが、機械の手で掴んだペットボトルを傾け、こぼれないようにコップにお茶を注いで、進呈した。見事な腕前には、「すごい」と子供たちから歓声が上がっていた。



『キンドリングクラッカー』で焚き付けづくり



男の子の力でも簡単にバカンと割れる

薪をさらに細かく割る“焚き付け”づくりにも、危険はひそんでいる。木口の面積が小さいから、うつかり指を傷付けたれるところが薪割りの爽快感だ。斧を振り下ろすと同時に、膝を曲げるのがコツで、そうしないと腰の位置が支点となつて、半円を描いた刃が、自分の脛を直撃することになるから要注意だ。



父子で斧を持ち、「せーの」

り、先の尖った木片が顔に飛んできたり。

そこで考案されたのが『キンドリングクラッカー』。安全な焚き付けづくりの道具なのだ。

斧やナタを“振り下ろす”ことによって生じる危険を、逆転の発想で、刃を上向きにしたところが特許。つまり、薪を上から割るのではなく、頭を叩いて、下から割るようにしたもの。

考案したのは、13歳(2013年)だったニュージーランドの少女。斧で焚き付けを作る母親

のケガを心配した“親思い”が発明につながったのである。

形状は、名のとおりに、リング(輪)。その中に、上向きにした刃が固定されていて、そこに薪を載せる。最初はハンマーでトントンして軽く刃に食い込ませ、それからやや力を入れて叩く。パカンと割れる。リングがあるから、添えた指を離しても薪は倒れない。木片も飛ばない。

目の前でじっと見ていた母子連れの男の子に、「やつてみる?」と相馬壮氏(ウツドラツク)がハンマーを差し出した。「うん。男の子が輪の中に薪を載せる。ハンマーでトントンしてから、面白いように割れる。楽だし速いし安全。見る間に焚き付けが増えていく。そばにしゃがんだ母親も、安心顔で眺めていた。



チェンソーアートでかわいらしいクマを彫り出す女性



県林政課の女子職員が「枝払い」に挑戦

丸太を相手に、一歩間違えばハンマーでトントン

林業女子@青森も参加 キノコ入りせんべい汁



テントの下で、せんべい汁を販売していた『林業女子@青森』



子供たちの人気を集めたボカーリング

危険なチェーンソーを扱うのだから、『男の世界』と思いきや、チエンソーアートのブースに、さつきはいなかつた若い女性が一人加わって製作を始めていた。ピンクのヘルメットを被り、地面に片膝をつきながら削り出している動物は、クマさんだ。ヒグマではなく、縫いぐるみのようなクマさんというところがいかにも女性らしい。

一方、鮮やかなオレンジ色の防護衣をまとい、「枝払い」の体験に挑戦していたのも、県林政課の若い女子職員。枝払いは、伐木チャンピオンシップの競技の一つで、丸太から突き出る枝に見立てた丸棒を、いかに速く、正確に、安全に切り落とせるか、そのタイムを競うもの。指導したプロのチェーンソー、ウーマンの坪さん(十和田市)

が背後から見守る中、なかなかのチエーンソーさばきを見せ、ゴールするとヘルメットの下から笑顔がのぞいていた。

テントの下で、“いい匂い”を発信していたのは『林業女子@青森』のブース。「せんべい汁、いかがですかー」と明るく呼びかける。

山の幸のサモダシ(ナラタケ)入りで、1杯200円。

木材の生産だけでなく、“食”においても人の暮らしと繋がっている森林・林業。女性ならではの視点で参加しよう——と県の女子職員10人で結成(2017年8月)した。せんべい汁が好評だったようで、イベントの日に6人も新たに会員になってくれたそうだ。

一方、子供たちの人気を集めたのは、ボカーリング。ボウリングとカーリングを合わせた名称で、ボールも、ストーンも木製だ。ボウリングは、緩い勾配の滑り台を木の球を転がし、カーリングは、底に滑車を付け

たストーンを滑らせる。それ一回と取っ手を手放したストーンが、ピンに命中したり、外れたり。子供に負けじとお婆さんも挑戦。やつたあ！ と拍手を贈ったのはお孫さんたちのようだつた。

これが木で作つたものか——と驚かされたのが、バイクだ。女の子がまたがつている3輪のバイク。全部木で、後部のタイヤ(木の輪)を足で蹴るとちゃんと回るようにもなつていて。一体、どうやって作ったのだろう。乗つている女の子の笑みが絶えなかつた。木に触れると“いい笑顔”になるようだ。

木は、家にもなる。薪にもなる。間伐されずに荒れている森林を手入れし、健康な状態に維持管理して得られる恵みを享受するのは、人間なのである。

会場の全景を撮影しようと、斜面を登り、高台からカメラを向けてみて、気が付いたことがあつた。うつむいてスマホを見ている人が、1人もいなかつた。



全て木で作られた驚きの3輪バイク。子供たちは木に触れると自然と笑顔になる